

第27回 文学館演習 —日本近代文学資料の探索と処理—

2025年度 講義概要

2025年8月26日(火)～8月30日(土) 於：日本近代文学館講堂

近代文学の勉強法を知りたい人は必修！
使用する資料はすべて本物です！
博物館実習・近代文学の単位にできます！

講義概要

1. 総論

①近代文学館とは

(日本近代文学館理事長)

②日本近代文学館の所蔵資料とその意義

(日本近代文学館専務理事)

日本近代文学館の歴史を振り返ると共に、資料の収集が実際にどのような形で進められているのか、その経緯や成り立ちについて解説する。作品の発表された雑誌や初刊本に実際に触れることの重要性、原稿、手紙など、直筆資料の研究上の意義などについて概説したい。それを通して日本近代文学館の特色について、あらためて理解を深めて頂ければ幸いである。

資料の

声を聞く—

公益財団法人 日本近代文学館

THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE
Komaba, TOKYO

153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-55

(駒場公園内)

tel 03-3468-4181

<http://www.bungakukan.or.jp/>



2. 資料の収集と活用

①資料を活用する研究法 (講義・演習) 図書

石田仁志 (東洋大学元教授)

文学は、新聞・雑誌・書物といった〈容れもの〉に入れられて初めて読者の元に届く。では、そのうち書物を取りあげるとどのような見方ができるか。まずは、永井荷風の『ふらんす物語』の発禁処分事件とその後のバリエーションから「書物」の変化を考える。また、横光利一「旅愁」の新聞初出から戦前単行本、戦後単行本へと移り変わっていく中で、新聞挿絵を描いた藤田嗣治との接点を考えていきたい。

②資料を活用する研究法 (講義・演習) 自筆資料

渡部麻実 (日本女子大学教授)

近代文学の資料には、活字化された資料と手書き資料という、二つの形がある。後者には、創作メモ・ノート、草稿、書簡、日記のほか、活字化されたテキストへの書き込みといった自筆資料が含まれる。自筆資料に目を向けること、あるいは、自筆資料と活字化された資料とを見比べることで、新たに何が見えてくるのだろうか。近代作家が遺した資料をひもときながら、文学研究における自筆資料の分析方法と可能性について考える。

図書・雑誌の利用 (実習)

書庫には、日本近代文学館にしか所蔵されていない貴重な図書・雑誌が数多くあります。普段は職員以外の入庫はできませんが、演習日は特別です。①・③の講義をふまえ、実際に書庫に入って図書・雑誌を手にとり、自由なテーマでミニレポートを書いてみましょう。(スリッパ持参ください)

③資料を活用する研究法 (講義・演習) 雑誌

大原祐治 (実践女子大学教授)

いわゆる文芸誌のみならず、総合誌や各種専門誌など、さまざまな雑誌のなかに文芸欄が設けられきたことからわかるように、近代文学の歴史と雑誌は深く関わっている。雑誌を刊行した出版社および編集者が果たした役割について考えることは、文学研究における重要な課題である。作家志望者や新進作家たちが自ら刊行した同人雑誌の存在と、そこで形成される人的ネットワークの問題も見逃せない。雑誌に注目し、資料として活用することで、どのような研究が可能になるのか。具体的な事例を紹介しながら考えたい。

挿絵・写真資料の調査・保存 (実習)

文学館の挿絵・写真資料は出版物やテレビ番組などで広く利用されています。その整理・保存方法について、写真利用カードを作りながら学んでみましょう。

④資料を活用する研究法 (講義・演習) 新聞

山田俊治 (横浜市立大学名誉教授)

近代社会に固有の文学形式である小説は、どのように成立したのであろう。その成立に当たり、近代社会の主要なマスメディアであった新聞が果たした役割は、無視することができない。新聞が小説を復活させる原動力となり、新たな出版形態と結びついて流行現象となったのである。そうした過程を、文学館所蔵の草双紙類を具体的に参照しながら、『小説神髓』によって小説が言語芸術となるまでの時代について考えてみようと思う。

肉筆資料の解説 (実習)

所蔵する肉筆資料を公開する機会を設けることも、文学館の大切な仕事です。この時間では館報「日本近代文学館」の例にならって文学者の手紙を翻刻してみよう。くずし字解説に挑戦！

3. 文学をめぐる問題

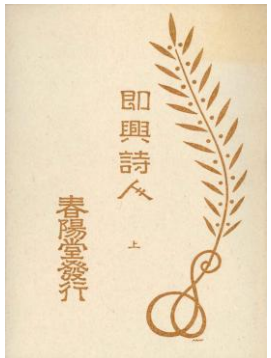
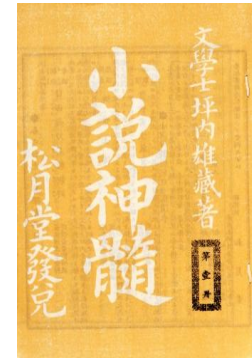
①海外における日本文学の研究（講義・演習）
和田博文（東洋大学名誉教授）

海外の研究者との国際的共同研究は、ここ20年ほどの間に活性化してきた。デジタルデータの拡大や、ZOOMの使用は、共同研究の可能性を大きく開こうとしている。21世紀初頭からのヨーロッパや東アジアの研究者との共同研究に触れながら、東アジアのエリアにおける研究の今後を展望する。今年度は「上海は本当に魔都だったのか」というテーマで、日本・中国・台湾の研究者の共同研究を紹介する。



②文学と大衆（講義・演習）
山岸郁子（日本大学教授）

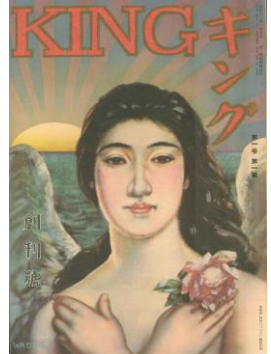
1930年代前後、教育の普及と円本ブームによって新たな大量の読者層が登場し、文学は「大衆」化した。出版メディアは新たな読者へ向けてジャンルを超えた雑誌や全集の企画を展開していく。本館が所蔵する当時の雑誌や全集から、「大衆」層を意識した編集方針や雑誌構成について確認し、言論や文芸がどのように「商品」化され、「価値」を生み出すものになったのか、現代にも繋がる仕組みについて解きほぐしていきたい。



4. 文学の周辺(1)

①文学と映画（講義・演習）
吉田司雄（近代文学研究者）

近年、映画研究の進展には目覚ましいものがあるが、一方でビデオテープの「2025年問題」が言われ、映像資料の保存が大きな課題となっている。こうした状況を踏まえながら、文学研究と映画研究とが交差する領域について考えたい。文学者の映画体験や映画製作への参画、アダプテーション研究など、衣笠貞之助監督「狂つた一頁」、黒澤明監督「羅生門」といった著名な映画のみならず、マイナーな作品にも目を向けたいと思っている。



②出版メディアの戦略・検閲（講義・演習）
五味淵典嗣（早稲田大学教授）

日中戦争・アジア太平洋戦争期の文学表現を検討する上で、言説の検閲や統制というファクターを考慮することは不可欠である。この授業では、本館が所蔵する戦時期の文学雑誌を参照しながら、戦時体制下の著作者や出版社が検閲や統制の枠組みとどう向きあったか、表現の現場にどんな力が作用していたのかを検討したい。合わせて、検閲や統制を意識した研究を行う上で参照すべき資料等についても解説する。



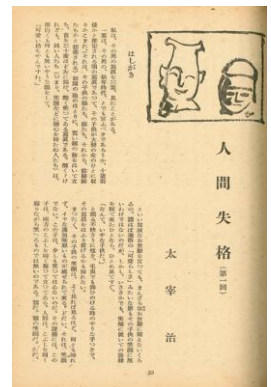
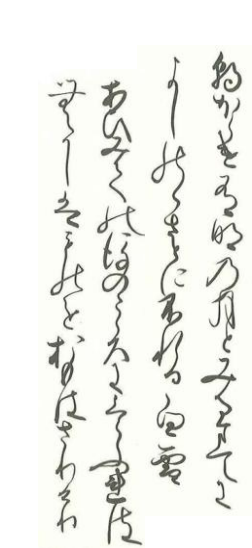
5. 資料の保存・公開・展観

①資料の保存・修理（実習）

和本の四つ目綴じ補修をします。文学館で所蔵している「中里介山文庫」（中里介山旧蔵書）を使用します。（太めの縫い針一本持参ください）

②資料の公開・展示／図録（実習）

文学館が所蔵する資料をいかに公開・展観し、文学の魅力をいかに伝えるか、展覧会などを例に考えてみましょう。



6. 文学の周辺(2)

①挿絵・口絵と文学（講義・演習）
出口智之（東京大学准教授）

あまり知られていないが、近代の作家たちもかなりの期間、江戸の戯作者同様に、口絵や挿絵に詳細な指示を与えていた。しかも、あえて文章とは異なる内容の絵柄を指示し、分業を図った例が少なくない。すなわち、近代文学の時代においてもなお、絵と文章のセットで作品が構想されていたのである。この講義では、文章からはわからない作家の作意や作品上の効果を、実例とともに解説し、絵と文章を総合的に捉える必要性と可能性について考える。

②文学と美術・音楽・舞踊（講義・演習）
坪井秀人（早稲田大学教授）

近代文学にはその根底に常に総合芸術への夢と欲望が胚胎していた。文学の歴史を出版や音声のメディアの技術的發展と切り離して考えることはできない。とりわけ詩歌の分野においてはそうした発想は不可避であろう。ここでは大正期の北原白秋と山田耕筰などの事例をもとに詩と歌謡そして舞踊や美術とがどのように切り結んだのか、さらには西欧におけるジャポニズムがどのように逆流してきたのかのについて考えてみたい。